

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

第33回「安息日」

後藤滋樹
goto@goto.info.waseda.ac.jp
早稲田大学 理工学部 情報学科

【昼と夜の区別がない】

電子メールは確かに便利だ。しかし健康のためには使い過ぎに注意したほうが良い。電子メールは好きな時に読める。相手が送信した時刻と、こちらが読む時刻とは関係がない。これは蓄積型の通信の大きな利点である。電子メールを使えばお互いの生活のペースを守れるように思える。しかし、これは受信するメールの本数が少ない場合の話である。

1日に200通も受信するようになると、様相が変化する。全部に返事を書く必要はないのだが、それでも多数の返事を書かなくてはならない。読んだ直後に返事を書く必要もないのだが、溜めると次のメールの束が届いてしまう。

かくして昼夜に関係なく、メールを読むと仕事が始まってしまう。これがネットワーク社会の常識だと思ふ人もあるだろうが、この傾向に警告を發する意見もある。

【ジキルとハイドの勧め】

私がNTTの研究所に勤務していたころ、研究室長であった中村義作先生(現・東海大学教授)は次のように言われた。「君たち研究者は、昼と夜と同じことを考えてはいけぬ。昼は現在の研究テーマに専念せよ。夜は将来のために、今の研究とは違う分野の本を読むべし」

中村先生によれば、昼も夜も同じ研究を続けていけば、そのうちに行き詰まるという。「研究は必ず終わる。うまく行けば成功裏に終わる。難しい研究は失敗で終わる。いずれ必ず終わるのであるから、その先を考えておくのがプロの研究者だ」。その段になって次のテーマを慌てて探すようではダメだという。

「研究者にとって時間はお金よりも貴重なもの。会社の経営者が手持ちの資金をどのように使うか考えてみよ。目の前の事業に全部投資したら笑われるだろう。将来への投資を忘れてはいけぬ。中村先生ご自身は、このような教訓を確かに実践されていた。その弟子格たる我々は、どうも昼夜を問わず同じことをやっていたように思う。今になって反省している。

【忙中閑あり】

ここで読者諸兄を私の反省の巻き添えにしよう。

ネットワーク時代になると、昼と夜の区別が薄れてしまう。欧米との通信には時差もあるので、何が昼かわからない。

そこで、中村先生の教訓を文字通り昼夜と解釈するのではなく、時間の使い方の区別として活用する。つまり昼を「目の前仕事に専念」する時間帯、夜を「将来への投資」とする。この夜に相当する時間帯を1日の中で確保せよ、ということになる。

この2つを自由にスイッチするのは、結構難しいように思える。結局深夜まで残業して昼の続きになるような気がする。それではダメなのであって、なお反省が必要だ。昔から「忙中閑あり」というのは、このような教訓を意味するのかもしれない。

【疲れを知らないコンピュータ】

それにしても私たちは忙し過ぎる。かといって連続して働くと能率が低下する。私は睡眠不足に弱い。忙しい日が連続すると、その反動で長時間の連続睡眠をとる。平均すれば規則正しく仕事をしたほうが良さそうなものだ。これが安息日の教えであろう。

睡眠不足の状態では感覚が鈍くな

る。そのせいだろうか、強い表現を使って喧嘩が起きたりする。人間の神経系をリセットするには睡眠が必要なのだと思う。

それにつけてもコンピュータは疲れを知らない。この点では人間には勝ち目が無い。我々は、もっとコンピュータに働いてもらうことにしよう。電子メールで質問に答えるのに、人間が返事を書くのでは疲れる。メールの自動応答をすれば手間が省ける。質問する人が必要な情報をWWWのサーバーで読んでくれれば、メールの必要もなくなる。

【「頑張る」という言葉】

私たちは、とにかく頑張っている。ところで、この「頑張る」という言葉は不思議なものだ。児童心理学者によると、幼児は頑張るという言葉を理解できず、「いきばること」と思ったりするという。またタイ語の辞書を編纂した小林豊氏によれば、タイ語には「努力する」はあっても「頑張る」はないらしい。無理に訳すと「死ぬまで闘う」となる由。

ひたすら「頑張って」きた日本人も、ゆっくり休息して、今後の作戦を練るべき時期になったのかもしれない。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp